

剣道指導における「わざ言語」の特異性

教科・領域教育専攻
生活・健康系コース
加藤 弘貴

指導教員 木原 資裕

I 諸言

日本固有の文化である武道は、武技や武術といった人を殺傷するという殺傷の術としての起源を持ちつつも対人的運動を通して相手を敬うことや自己形成の手段といった高い倫理性や思考性を持つ運動へと高められていった経緯がある。とりわけ剣道は、「剣道は剣の理法の修錬による人間形成の道である」という全日本剣道連盟が制定した剣道の理念のもと、現在でも道場や部活動などで老若男女問わず幅広い年代の愛好者が剣道を行っている。また、平成24年春から中学校の体育授業で男女の武道の必修化になったことにより今までに剣道にふれることがなかった生徒たちも剣道にふれることとなったので、学校教育・社会・部活動などの様々な場で剣道指導が行われていると考えられる。

剣道を短時間で紹介する意図をもって制作されたテレビ番組に『SAMURAI SPIRIT』という番組がある。この『SAMURAI SPIRIT』の中で「気・剣・体」や「四戒」といった言葉は剣道を初めて行う剣道初心者や剣道を行っているがあるレベルまで達していない者にはなじみがない言語である。これらの言語を音声のみで使うと「危険体」や「視界」など誤った「わざ言語」で認識してしまう可能性が高い。実際、筆者自身も「気・剣・体」や「四戒」という言語を耳にして、その意味を理解したのは高校2年生の時(剣道経験8年)であった。初心者はもちろん剣道

経験者にもあまり認知されていない「わざ言語」が存在している。

生田久美子(2011)はその著書『わざ言語—感覚の共有を通しての「学び」へ—』の中で科学言語や記述言語とは異なる独特な言語表現を指して「わざ言語」としている。さらに、身体に根ざした感覚の共有を促す言葉でもあるとの認識を示している。

以上のことから本研究では、剣道における「わざ言語」の実態を把握するとともに「わざ言語」が示す動作や状態を明らかにする。また剣道指導における「わざ言語」の独特な表現や言い回しなどを見出すことで剣道指導において「わざ言語」がどのような特異性を持っているのかを検討し、学校教育の場や剣道界に活かすことによって、剣道指導におけるさらなる充実・発展に資することを目的とする。

II 研究方法

- 1) 『剣道辞典—技術と文化の歴史—』・『中・高生のための剣道』より索引で使用されている言語の中で「わざ言語」に該当すると思われる言語を収集する。
- 2) 収集した「わざ言語」を動作を表す「わざ言語」・状態を表す「わざ言語」の基準で3つのカテゴリーに分類する
- 3) 上記2)カテゴリーの中において動作を表す「わざ言語」のカテゴリーについてさらにその

使用場面で5つのカテゴリーに分類・整理し、「わざ言語」が示す動作について検討した。

4) 分類・整理した「わざ言語」が月刊誌『剣道時代』連載の「剣道授業シリーズ」で授業を行う先生がどのような表現で使っているのかを抽出し、剣道指導において「わざ言語」がどのような特異性を持っているのかを検討した。

III 結果と考察

1) 竹刀操作の「わざ言語」

竹刀操作の「わざ言語」では剣道指導においてよく使われている、あまり使われていない、全く使われていない「わざ言語」がはっきりと分かれていた。また、竹刀操作における「わざ言語」では「剣を殺す」・「中心を制する」といった独特な表現や「鞭のようなしなやかな打ち」・「パパッと瞬間的に打ち切る」などの擬音語・比喩的表現も確認できた。

2) 足さばきの「わざ言語」

足さばきの基本となる五つの足さばきや下半身の使い方の重要性を説いた『下部の三処』などの「わざ言語」の指導表現が多く使われていた。『盗み足』・『三つの嫌う足』の指導表現は見られなかった。また、足さばきでも「スッと入ったとき」や「床をするようなかたちで」などの擬音語・比喩的表現が確認できた。

3) 体操作の「わざ言語」

体操作の「わざ言語」は『沓え』以外の「わざ言語」は足さばき（特に開き足）と連動して起こす動作であり、指導表現などからもたびたび足さばきとセットで表現されることがあった。一方で『沓え』においては、指導表現などから具体的に表現されていない「わざ言語」であり、指導する上では表現しにくい曖昧な「わざ言語」ではないかと推察された。

4) 目付けの「わざ言語」

目付けの「わざ言語」では剣道独特の「わざ言語」が多く見られ、『遠山の目付け』のような比喩的表現を含んだ「わざ言語」も見られた。また『観見の目付け』では宮本武蔵が編纂した「五輪書」、『二の目付け』では千葉周作が編纂した「北辰一刀流十二箇条訳」で書かれており、目付けについての「わざ言語」は昔から現在まで変わることなく使われている「わざ言語」であった。

5) 間合の「わざ言語」

間合の「わざ言語」である『触刃の間合』、『交刃の間合』は指導表現では遠間から打ち間に入るのに使われている「わざ言語」であり、意味も理解して使われていたが、『一足一刀の間合』の指導表現はほとんどが一足一刀の意味を理解して表現されていたが一部の表現で『一足一刀の間合』の誤った表現が見受けられた。

IV 結語

本研究では、剣道指導のさらなる発展・充実を図るため、剣道での基本動作である5つの動作に焦点を当て、「わざ言語」の実態把握ができた。また、指導場面においては、「わざ言語」の擬音語・比喩的表現が見られた。これは、動作が複雑である「わざ言語」や「わざ言語」だけでは表現しがたい曖昧な「わざ言語」においては、擬音語や比喩的表現が使われていると考えられる。しかし、本研究では筆者の能力と時間の関係で、剣道の基本動作のみを取り上げることとなった。今後の課題として、今回取り上げられなかった、心理的状态を表す「わざ言語」・動作と心の両方を表す「わざ言語」を収集し、さらなる「わざ言語」の展開を考えている。